関西の龍×狩人

1R1分1秒KO

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて神室町に悲劇をもたらしたゾンビ事件から一ヶ月…たこ焼き屋を営んでいる郷田龍司はとあることを境に行方不明となり神室町から消えてしまった。

その神室町から消えた龍司は目が覚めると…そこには見慣れぬ光景があった。龍司は日本に戻るためにハンター試験に挑む。

目次

第1話　ゴンという少年 ―― 1
第2話　同伴者、レオリオとクラピカ ―― 7
第3話　ハンター本試験開始 ―― 14
第4話　二次試験開始 ―― 20
第5話　ハンター協会会長ネテロのゲーム1 ―― 26
第6話　ハンター協会会長ネテロのゲーム2 ―― 31
第7話　トリックタワー攻略1 ―― 37
第8話　トリックタワー攻略2 ―― 43
第9話　四次試験の概要 ―― 49

第1話　ゴンという少年

神室町にて起きたゾンビ事件が解決し、一ヶ月後、郷田龍司こと龍司は神室町でたこ焼き屋を営んでいた。

「……あかんタコ切れてもうた」

口コミなどで龍司のたこ焼き屋はあまりにもうまく軌道に乗り過ぎた。その結果たこ焼きの材料となるタコがなくなってしまったのだ。

「(今日はもう夜やし、しまいやな。この調子やと明日もタコがなくなるかもしれへん。海にいって多めにタコの調達でもしよか)」

龍司は店を閉め、埠頭へと向かった。タコを釣るためである。いくら漁師が漁で獲ったとはいえ釣りたてには敵わない上、限度がある。そのため自分で釣る選択をしたのだ。偶にタコを仕入れる時はそうするのだ。

「今日はやたら静かやな」

それが今日、埠頭に来た龍司の感想だった。いつもならタコを仕入れる際はこんな静かではない。しかし今日に限って違かった。海にいる魚がいる気配を感じるのだが、まるで嵐の前の静けさという表現が似合うような静けさだった。

「まあええ、やるだけやってみよか」

しかしそんなことはお構いなしに龍司は釣竿を使い、タコ釣りを始めた。すると波が発生し、それまでの静けさが不気味さを生み出し、龍司の釣竿の餌に何かが引っかかった。

「よっしゃぁっ!」

龍司はすかさず反応し、ルアーを巻くとこれまでにない大物が引っかかる感覚があった。タコは釣れなくともこれがマグロやシーラカンス、カジキであれば相当な値段で売れるのは間違いない。龍司はそういう目的でも釣りをしに来たとも言える

「うおぉぉぉっ!!」

しかし龍司がどれだけ引っ張ってもむしろ後退する一方でこれ以上無理をすれば糸が切れる。そんな状況の中、龍司は諦めなかった。

「釣れろやボケがぁっ！」
　龍司は釣竿を引っ張り、無理やり陸にあげようとするものの淵の近くまで来ていた龍司は一瞬の不意を突かれた。
「なぁっ!?」
　そして足が滑り、海へと落ちてしまった。
　龍司は釣竿を離そうとするが硬直してしまい釣竿ごと海の中へと消えた。その日から龍司の探索は進んだが見つからず数日後、龍司は正式に行方不明となり神室町から消えた。
　～某所～
「……あ、起きた？」
　龍司が目覚めると見慣れない天井があり、見慣れない女性に声をかけられた。
「ここはどこや？それにあんさんは？」
　龍司は上半身だけ起き上がり、女性に尋ねた。
「ここはくじら島よ。私はミトよ」
　それを聞いた龍司は首をかしげた。それもそのはず。龍司はかつて関西の龍（その二つ名は本人は嫌がるが）と呼ばれる極道つまり世間一般でいうところのヤクザだった。しかもただのヤクザではなく一時はヤクザ最大の組織近江連合で最も勢いがある男と言われ、現在でも関西史上最強と言われている男だ。そんなヤクザをやっていた以上地名に関しては少なくとも知識があるがそんな名前の島は聞いたことがない。
「くじら島？　そないな島聞いたことあらへんな。日本のどこや？」
　龍司はミトと自分が話している限りではここは日本だと思ってそう質問したが予想外の言葉が返された。
「ニホン？　もしかしてジャポンのこと？」
　ミトは日本のことをジャポンと答えたことから日本に相当するのがジャポンであることがうかがえ、英語に近い響きから外国だと考えるのだが、龍司は違った。
「（日本のことをジャポンなんて言うとは……わかりにくい嬢ちゃんやのう。せやけど日本のことをジャポンと答えとった以上考えられ

るんは地方に間違いないわ)」
　龍司はそれをさらに曲解させてしまった。龍司は地方の名前は知っていても方言は知らない。強いていうなら龍司から見て方言は東京弁もとい標準語しか知らないのだ。元々英語のジャパンは日本が訛ったジパングから派生したものなので龍司が日本をジャポンという方言を使う地方だと勘違いするのは無理なかった。
「多分それや。それでこのくじら島はそのジャポンのどこにあるんや？」
　龍司は勘違いしたまま尋ねるとミトはため息を吐いた。
「ここはジャポンじゃないわよ」
「ん？　つまりここはくじら島っていう国なんやな？」
　ややこしいのう、と龍司は呟きながらも考えていた。そんな国は聞いたこともない。もしかしたら世界に知られていないだけで自分も知らなかったということになる。龍司の頭の中では既にどうやって神室町に帰るか考えていた。
「平たく言うとそうね。ところで貴方の名前は？」
　そのセリフでこれまで龍司は自分が自己紹介していなかったことに気づいた。
「こりゃ失礼。ワシは郷田龍司。ただのたこ焼き屋……ん？」
　龍司が頭を下げると違和感に気付く。龍司の右腕は自分の身を守るためにガトリングガン装備の義手となっていたのだが、生の感覚があった。
「(元に戻っとる？)」
　龍司はそれを確かめるために握ったり、放したりしてその感触を感じ、ミトはそれを見て奇妙に思った。
「右手がどうしたの？」
　ミトは龍司の様子を不審に思い、尋ねると龍司は首を振った。
「なんでもないわ。それよりワシを海から助けてくれはったんはミトはんか？」
「ただいま！ミトさん！」
　龍司が聞こうとすると、声変わりもしていない少年の声が聞こえそ

ここにはツンツン頭の少年がいた。
「あ、起きたんだね。おじさん！」
少年は安堵のため息を吐いて龍司の隣に座った。
「もしかしてワシを助けたんは自分か？」
「魚を釣り行ったらおじさんが流れていたからすぐに手当てしたんだよ！」
「さよか、ほなら名前教えてくれへんか？礼がしたい。ワシの名前は郷田龍司や。そっち風にいうならリュージ＝ゴーダやな」
「俺はゴン！ゴン＝フリークス！」
その名前を聞いて龍司は頭を下げた。
「ミトはん。ゴン、ワシを助けてくれておおきに。感謝しております」
「どういたしまして！リュージさん！」
こうして龍司とゴンは出会った。
ゴンとミトが部屋からいなくなり、龍司は1人考えていた。
「さて、これで問題はどうやって日本に帰るかやな」
龍司は日本に帰ることを考えていたが今の所持金では日本国内の飛行機に乗ることどころかその所持金は使えることすら怪しい。
「となれば、ここで働いて日本に帰るのがベターや」
龍司はくじら島でたこ焼き屋を開くことに決め、その稼ぎで日本に帰ることを決意した。
「だからダメに決まっているでしょ！」
「（なんや今の声は？）」
ミトの荒ぶる声が聞こえ、龍司はそちらに耳を傾けた。
「それならさ、沼の主を釣ったら文句ないでしょ？」
「出来たらね。大の大人5人がかりでも釣り上げなれなかったのよ」
「約束だよ！」
「（沼の主か……それも気になるがゴンは主を釣るなんて言い出したんや？　尾行して聞いてみよか）」
龍司はゴンを尾行してついて行くとゴンは沼で釣りを始めた。尾行した理由は2人きりで話せる機会を伺う為だ。そして今、その時が来た。

「ゴン、さっきの話し聞いたで」
「リュージさん」
「詳しくはわからんが何を条件にあないなことを言い出したんや？」
「俺、ハンターになりたいんだ」
「ハンター？　何やそれ？」
「ハンターを知らないの？」
「知らん。ワシのとこにはそないな言葉聞いたことあらへん。どないなもんか教えてくれへんか？」
「じゃあ説明するよ」
　龍司はゴンからハンターの説明を受けていくうちに日本に帰れる可能性が見えて来て興味がわいた。
「なるほどな、ワシも受けてみよ」
　ゴンが言うにはハンターは身分証明書にもなるので身分が証明できない龍司にとってはまさに欲しいものそのものだった。
「それじゃ俺がミトさんに説明しておくよ。ミトさんは子供の俺に過保護だけどリュージさんならきっとわかってくれるよ」
「頼むで……ん？」
　龍司はゴンの竿を見ると浮きが沈んでおり、その影には巨大な魚が映っていた。
「ゴン、引いてんで」
　その一言でゴンは影を見つけると引っ張り始めた。
「キタキタキタァァーッっ!!」
　ゴンはその釣竿の感覚から大物、いや主が引っかかったことに歓喜して引っ張り、釣り上げた。
「（おいおい冗談やないで。沼にこないな魚ほんまにおるんか？）」
　龍司はゴンが歓喜している一方、魚の大きさに呆れてしまった。何しろその魚は今まで釣った３ｍ超のマグロよりも一回り小さいサイズだったからだ。あの広大な海の魚ですら３ｍが限界なのだ。川や沼に住む魚となればそれよりもサイズが小さくなるのは当然のことだ。それにもかかわらずこのサイズとなれば間違いなく沼の魚では世界最大だろう。

「それじゃミトさんにリュージさんがハンターになりたいって言っておくから先帰るね！」
「済まんの。いきなりこないなこと言って」
「良いんだよ。俺だってハンター目指しているんだから！」
ゴンは駆け足で主を持って帰るとそこに龍司１人だけが残されていた。
「ハンター試験か。過酷な戦いなんやろな」
龍司はそう呟いて歩いて帰った。

第2話　同伴者、レオリオとクラピカ

龍司はゴンとともに船に乗ってハンター試験会場へと向かっていた。

「(それにしてもこんな小っさい船で移動するとは思わんかったわ。どんだけ期待していないんや?それで満席になるどころかスカスカになるのも気に食わん。)」

龍司は志願者数百万人近くのうち合格できるのは10人以下という過酷な試験だとゴンから聞いていたが容易すぎた。この場にいるのは船員、龍司、ゴン、ハンモックで寝ている金髪の美少年、ニヤニヤしながらエロ本を読んでいる黒スーツのチンピラという状態だった。もちろん最初こそは数が多かったが荒すぎる船長の運転について行けず脱落してしまったのだ。

「(どうやら今のところ大丈夫そうやで…ミトはん。)」

龍司はくじら島の方向に向かってそう思っていた。先ほどまで憤怒していたとは言え安堵もしていた。そう…あれは数日前の事だ。

〜数日前〜

ゴンは眠り、ミトと龍司だけが起きていた。

「リュージさん…何でハンターになろうと決意したの?」

ミトがそう尋ねると龍司は決意した顔になった。

「ワシは元の場所へ帰りたいんや…せやけど帰る手立てがない。パスポートを作るにしても身分証が必要や。」

「その身分証がハンター資格証…って言いたいの?」

「せや。それさえあればワシは元の場所に帰れる。自分勝手なのはわかっとるが…ワシをハンター試験に行かせて貰えへんか!?」

龍司はミトに頭を下げ、長い数秒が経ちミトはため息を吐いた。

「わかったわ。だけどリュージさん…ゴンのことをお願いします。あの子には危険な思いをさせたくないんです。」

「任せとけや。ミトはん…」

〜現実〜

こんな出来事があり龍司はハンター試験を受ける資格を得ていた。

もしここでゴンが脱落するようなら奮い立たせるのも自分の仕事だったがどうやら順調だったので安堵していたのだ。
「で…お前たちは何でハンターになりたいんだ？」
しばらくすると残った龍司を含めたハンター志願者達に船長がそう質問した。
最初に答えたのは龍司だった。
「ワシは身分を証明して故郷に戻る為や…故郷で待っとる人間がおる。ワシはそれに応えなあかんねや。」
「それはどんな人物だ？」
「ワシのたこ焼きを待っとるお客はんや。ワシは故郷でたこ焼き屋をやっていたんやけど事故で国に戻れんようになってもうた。せやからハンターの資格証が必要なんや。」
「…理由はわかったがたこ焼きってなんだ？」
船長は単なる好奇心で聞いたがそれがいけなかった…
「たこ焼きは粉もんの食べもんでな、たこ焼きの生地を一口サイズのボール状にして焼いて食う食べもんや。中にタコが入っていることからたこ焼きちゅー名前が付いたんや。」
龍司はそこまでいうとたこ焼きの鉄板を取り出した。何故そこまでアピールするのかというと龍司はたこ焼きが好きすぎてたこ焼きを語ると周りの空気を読まなくなる。
「これがたこ焼きに使われるプレートや。この穴の中に…」
その後１０分間に及ぶ龍司のたこ焼き講座が続いた。龍司を除く全員がそれを聞いてたこ焼きを食べたくなったのは事実だが少しうんざりしたのも事実で船長は好奇心で深く追求するのをやめようと決意した。
その後ゴンと金髪の少年クラピカが理由をいって最後の1人となった。
「俺はレオリオ…俺がハンターになる理由は金よ。金さえあればなんでも買えるからなぁっ！」
チンピラことレオリオは高笑いを始めた…その行為は龍司にとある人物を思い出させていた。

「(あの笑い方といい、金に執着する部分といい…千石かいな。)」
かつて近江連合には近江四天王と呼ばれる人物がいた。東城会の五代目となってしまった元近江連合本部長の寺田、当時の近江連合本部長の高島、そして当時の近江連合の会長郷田仁の息子である龍司…そしてもう1人こそが今のレオリオに似ている千石という人物だった。
千石は金にものを言わせて自分のライバルを襲わせたり、二匹の虎を使って自分のライバルを殺そうとしたりした。最後にはそのライバルが大切にしている子供を人質にとっていたので龍司の気に障り殺された。
「(こいつはまだ間に合う…千石みたいにさせる訳にはあかん。)」
そんな理由から千石の評価は限りなく低く、レオリオに千石と同じ道を歩ませないために誘導するしかなかった。
「レオリオ、金で品性は買えないよ。」
クラピカがレオリオに指摘するとレオリオのこめかみに血筋が見えた。
「あぁっ!?てめえのクルタ族だかポルタ族だがなんだか知らねえが滅ぼしてやるよ!」
その言葉はクラピカの禁句だった。クラピカは静かに怒り始め、木刀を持った。
「取り消せ。その言葉。」
「取り消さねえよ、表へ出ろ!」
バシャッ!!
2人は文字通り冷水をかけられ、興奮していた様子はなくなる代わりに冷水をかけた人間は誰なのかを見た。
「頭冷やせや、アホが。」
そこには龍司がいた。かつての龍司だったら止めたりはしなかったが今は違う。それだけ丸くなり、大人しくなったというべきだろう。
「今表へ出たら確実に海に落とされる。そうなったら試験どころやない。やるんやったらハンター試験が始まってからにするんやな。」

「う…」
その言葉に何も言えなくなる2人は小さくなった。…レオリオは龍司の強面の顔を見てそうなったとも言えるがクラピカは違った。龍司の顔を見ても萎縮していないのだ。それに気づいた船長と龍司はクラピカの賞金首ハンターになる覚悟が出来ているということに気がついた。それでも小さくなっているのは龍司の言ったのは正論だからだ。
「それより…」
バンッ！
龍司が口を開くとドアが開き、そこには船員が顔を真っ青にしていた。
「船長大変だ！カッツォが流されちまった!!」
おそらくそのカッツォは船員だろうと判断すると龍司とゴンは即飛び出した。それに続いてクラピカとレオリオも飛び出した。
「うわぁぁぁっ！」
ガシッ!!
そのカッツォが海に面する寸前、ゴンが飛び出し、カッツォの足を掴んだ。
「ゴン！」
龍司は宙に浮いたゴンの両足を掴んで釣りの要領で引き上げた。
「危機一髪や…」
龍司は呟くとホッと一息ため息を吐いた。なおクラピカとレオリオはゴンに説教したのをきっかけに仲直りをしていた。その後、龍司一行は船長に気に入られ無条件でハンター試験会場の島まで船で移動し、一本杉を一直線に向かえというアドバイスまで貰ってそちらへと向かった。
その道を歩いて行くと老婆と仮面を被った男達が前に現れた。ちなみにだが道中ハンター試験会場行きのバスがあり、レオリオはそこで待とうとしたが「このバスに乗った奴らはハンター試験会場まで行けない」という噂を聞いて先に行った龍司達と合流したのは余談だ。
「ドキドキ二択クイ～～ズ!!」

「突然大声出すなや！ボケ！」
　龍司は目の血走った老婆が突然大声を出したことに苛立ち、怒鳴り返した。龍司はかつて極道時代、関西の龍と呼ばれても関西という地方限定が嫌だからという理由からキレたり、近江連合を手っ取り早く乗っ取るためにクーデターを起こしたりと短気な性格なのだ。いくら丸くなったとはいえその本性は変わらない。
「これから一問だけクイズを出題する答える時間は5秒。もし間違えたら即失格。今年のハンター試験は諦めな。①か②で答えな。それ以外のあいまいな答えは失格だよ。」
「ちょっと待てよ。この4人で一問だけってことか？もしこいつが間違えても俺達まで失格ってことだろ？」
　レオリオはクラピカを指してそれに疑問を尋ねた。
「あり得ないね。その逆の可能性が高くて泣きたくなるよ。」
　クラピカは不機嫌そうにそう言ってレオリオに反論した。
「逆に言えばこの4人のうち1人が知っていれば答えられるってことだよ。」
「確かにの…1人でごちゃごちゃ考えるよりかマシかもしれん。」
「ちょっとどいてくれないか？あまり時間をかけるようなら俺が答えるぜ。婆さん…それでも構わないよな？」
　別の男が割り込み、老婆に聞くと頷いた。
「うむ…では問題。お前の母親と恋人が悪党に捕まり1人しか助けられない。①母親②恋人…どちらを助ける？」
「①だ。恋人はまた探せばいいが母親は1人しかいねえ！」
「…よろしい。この先を通るがいい。」
　この会話を聞いた龍司は答えを出した。
「(そういうことかいな…最初はあいつと同じ理由で①や思うたけどそれは答えやない。あのオバハンは通れと言っただけで正解とは言うてないわ。せやけど②でもない。…答えはない。強いて言うなら沈黙や。)」
　クラピカも同じ解答にたどり着いたが激昂しているレオリオに教えようとすると老婆に止められた。

「では問題。お前の息子と娘が誘導された。①息子②娘…助けるとしたらどっち？」
　レオリオはおちょくられていると思い、数える度に血管のキレる音が聞こえ、棒を持ってぶん回していた。
「終了～～っ!!」
　そして老婆が大声を出して終了の宣言を出すとレオリオはその棒を思い切り降り下ろそうとしたが…まるで万力のような力で止められた。
「止めやレオリオ。」
　その万力のような力は龍司だった。龍司の力は突進してくる巨大な虎を捕まえて投げられる程にはある。もっともこれは推測でしかない。その理由は龍司より力がない者ですらそれができるので龍司もできるという訳だ。早い話が腕相撲で世界チャンピオンを負かした相手をさらに負かしたから最強という理屈だ。どうでもいいが。
「なんで止める!?このババアの首を手土産にしてハンター協会に届けてやるんだ！」
　レオリオは龍司に止められたことを激怒し、解こうともがくが解けない。それだけ龍司の力が異常なのだ。
「せっかくの合格を棒に振るつもりか？」
「何ぃ!?」
　クラピカの一言によりレオリオは抵抗を止め、棒を落とし龍司はレオリオの腕を解放した。
「さっきの奴は道を通った…せやけどそれが正解だと言っていないんや。そこでワシは気づいた。ほんまは答えなんぞありゃしない。言うて見れば沈黙こそが答えや。」
「その通り。本当の道はこっちだよ。一本道で2時間もすれば頂上に着く。」
　その言葉にレオリオは凍りつき解凍するまで数十秒かかると溶け始めた唇から言葉が出た。
「…すまない婆さん。」
「謝ることはないさ。お前みたいな奴に会いたくてこんなことをして

いるんだよ。頑張っていいハンターになりな。」
その言葉を聞いたレオリオは「ああ…」とだけ返した。
「う～ん…ダメだ！わかんないや！」
今頃になってゴンがそういって答えると龍司達は苦笑した。
「ゴン…もう試験は終わったで。」
「でもさ…本当に大切な人の２人のうち１人しか助けられなかったら…どうする？」
ゴンの言葉によって龍司達は硬直した。
「（…もうワシはそないな経験をしとる。せやからワシは二度とそないなことを起こさないようにする。…それがワシの答えかもしれんな。）」
龍司は口に出さず、２人は硬直したままで黙っていた。
「どっちを選んでも正解じゃないけどどちらか選ばなきゃいけない時はいつか来るかもしれないんだ。」
「…」
確かに…と言わんばかりに２人は黙っていた。それだけゴンの言うことも考えられたと言える。
パンパン！と龍司は手を鳴らし重い空気を少し軽くした。
「ほなこれで重い話は終わりや。試験会場まで行くで。」
龍司はそういって道を歩くと３人は慌てて龍司を追いかけた。

第３話　ハンター本試験開始

あれから龍司達はハプニングに巻き込まれたがゴンの活躍によりそれが案内人だと知り、暗号を教えてもらい試験会場に着いた。
「(ここが…試験会場かいな。思ったより数少ないのう。)」
龍司はその受験者の数の少なさに驚いていたがそれでも４００人くらいはいる。
「やあ、君たちで４０６人目だ。」
龍司達の目の前に現れたのは４０過ぎだと思われる中年男性だった。
「俺はトンパ。ベテランのハンター志願者だ。君達に志願者の情報を教えて…」
「ギャァァァッ!!」
トンパが話しを続けると遠くから悲鳴が聞こえ、そちらを見るとピエロらしい志願者が他の受験者の腕を切り落としていた。
「ぶつかったら謝るのは筋でしょ♠?ちゃんと謝んないからこうなるんだよ◆」
「(物騒なピエロやな…極道でもぶつかったくらい、あないなこと滅多にせえへんで。)」
流石の龍司と言えどもそのピエロが起こした行動に頭を抱えた。極道の世界では指を切り落としてケジメをつけるというやり方があるが腕を切り落とすのは稀なケースだ。龍司もそのケースにあたるかもしれないが自主的なものだったので含まない。
「あのイカれたピエロはヒソカ。去年試験官を半殺しにして試験を落とされた奴だ。奴には関わらない方が良い…それとベテランの勘だがあそこにいる針男も同類の臭いがしやがるからヒソカと同じく近づくのは止めた方がいい。」
トンパはヒソカと針男に近づかないように警告するとバックから缶ジュースを取り出した。
「ほらおすそ分けだ。新人には優しくしないとな。」
そう言ってトンパは龍司達にジュースを渡しゴンはそれを飲んだ。

「レロ…これ腐っているよ?」
ゴンはそれを吐き出して腐っていることを指摘するとトンパは冷や汗をかいて謝ろうとしたが…そうはいかなかった。
「ほう…ようやくボロ現しよったな?」
その声は龍司だった。だがいつもの穏やかな声ではなくかつての極道として生きた龍司の声だった。
「ひっ!?」
トンパは新人潰しを生きがいとしているベテランだが所詮は表の世界の住人。ジャパニーズマフィアという裏の世界を渡り歩いていた龍司に敵うはずがないのだ。言って見れば兎が真正面から熊に立ち向かうくらい無謀なことだった。
「こないなもん飲まそうとしたんや。指二本切ってケジメつけてもらおか?」
そう言って龍司はトンパの身体と手を床に押さえ、店から持ってきたナイフを取り出し…
ドズッ!!
龍司の持っていたナイフを床に突き刺した。
「…と昔のワシなら言っとったやろが今はちゃう…これを飲めや。」
そう言って渡してきたのはトンパが龍司に渡してきた下剤ジュースだ。こんなものを飲めば間違いなく自分は下痢でリタイアするだろう。
「そ、それは…勘弁して…」
「飲めへんのか?飲めへんやったら手伝ったるわ。」
龍司はトンパの口にジュースを突っ込ませて無理やり飲ませた。その行動はかつての極道時代の龍司を少し抑えたものだがそれでも過激なことには変わりない。龍司がここまで怒っているのはトンパによってゴンが試験始まる前にリタイアしてしまう可能性があったからだ。もっともゴンはトンパのジュースの異常さに気づいて吐き出したが龍司の逆鱗に触れることには違いなかった。
「モガッ!?うぐっ…」
ブリリッ!!

それを飲んだトンパは失禁してしまい、周囲が臭くなると龍司はトンパをゴミで見るような目で見ていた。
「これに懲りて二度とすんなやアホが。」
龍司達はそのまま前へと進んでいった。受験者達は今まで嵌められたという者が多く、トンパに対する同情は全くなく、むしろこう思っていた。
「トンパザマァ」
嫌われ過ぎである。
「それでは第一次試験を開始します。これから私の後について来て下さいね。」
試験官サトツは後ろを向いて歩き出すと試験者がそれに着いていくが様子がおかしくなった。
「(なんや?このどよめきは…?)」
龍司はその異変に気付くとレオリオも気付き始めた。
「前の方は走り出してやがるぞ!」
その声に後ろの参加者達は慌てて走り始めた。
「(面倒なことしてくれるのう…せやけどたいしたスピードやない。精々一般人のマラソンやろな。)」
実際には時速２０ｋｍというスピードであり相当速いペースなのだがハンター試験に出てくるのは超人ばかり。野性児たるゴンやその気になれば世界新記録を打ち立てられる龍司からすれば何の問題もなかった。もっとも龍司の世界には大型バイクを普通に振り回す冴島がいるので龍司はまだ普通と言えるだろう。
「そういえばおっさん。名前は何て言うんだ?」
途中ゴンと同い年の銀髪の少年、キルアがゴンと仲良くなり、一緒に走ることになった。
「リュージ＝ゴウダ。それがワシの名前や。」
龍司はキルアに自己紹介した。ちなみにレオリオとクラピカはキルアに自己紹介を終えている。
「じゃリュージのおっさん。見たところ５０代に見えるけどいくつなんだ?さっきレオリオが１９なんて言いやがったからさ…もしかし

ておっさんも１９なんてオチはないよな？」
　おっさんと言っている時点で怒らないのは龍司自身が慣れてしまったのに理由がある。
　そう、あれはバブル絶頂期の頃龍司は１２歳ながらにして既に大人と間違われる体格と老け顔でランドセルが似合わない小学生だった。その為龍司にボンタン（学ランのズボン）狩りをされた高校生はランドセルを背負った奇妙なヤクザとして認識されていた。そのくらい龍司は老け顔だったのだ。
「ワシは３５や。そないに若い訳ないやろ。」
　言っていることはもっともだが３５という数字が妙に生々しく、その場にいた全員が信じられない顔で龍司を見つめた。何しろあのトンパよりも若いのだ。
「なんやお前ら…ワシのことそないに５０以上やと思ったんかい。」
　流石に龍司は全員をジト目で見るとクラピカが口を開いて誤魔化した。
「信じられないだけだ。リュージと言いレオリオと言い年齢詐称しているのではないかと思ってしまったんだ。」
「まあええわ。もう慣れたしのう…」
　龍司は軽く凹んだ。
　龍司達が話しているその影で…一人脱落しそつになっている受験者がいた。その受験者はコヒューと息遣いもめちゃくちゃになっており完全にスタミナが切れていた。
「（いやだ…僕が脱落するのか…!?）」
　その受験者はニコルという少年だった。国へ帰れば超が付くほどのスーパーエリートだった。その為、ニコルは自分ならば楽にハンター試験をパスできると思い受けてみたのだが結果は御覧の通り…元々ハンター試験は龍司のような超人が争うような試験だ。たかが一般人の範囲でのエリートであるニコルが龍司達超人相手に出来るようなものではない。
「よう、信じられねえって面だな。」
　龍司のせいで遅れてしまったトンパはニコルに追い付き話しかけ

た。　彼は脱落したかに見えたが実際は下剤を解毒する薬を持ち、それを飲んで対処していたのだ。
「てめえに素質なんてねえよ。こんなところでくたばっているようじゃな…二度と試験を受けに来るんじゃねえ。」
　トンパはニコルをあっさりと追い越した。ニコルもトンパが龍司に絡み逆に下剤入りジュースを飲まされ失禁したのは知っている。それ故に糞野郎とニコルの頭の中でも馬鹿にしていたのだ。その糞野郎に追い抜かれてしまった事実がニコルの心を折らせた。
「あ…ァァ…!」
　そしてニコルは膝をつき、一人脱落者が出た。
「おいおい冗談だろ!?」
　サトツが走った道は階段でありサトツはそれを難なくかけ上がった。そのことに驚きを隠せない受験者達は思わず声を上げてしまう。そして一人目から脱落しなかった受験者達がようやく脱落し始めた。
「くそったれ…!」
　レオリオも例外ではなく他の試験者同様に足がヨレヨレになり、クラピカも少し息が上がり始めた…少年二人と龍司はまだまだ余裕があるのはやはり人外だからだろう。どちらにせよここでギブアップしたい…そう考えてしまうレオリオがいた。
「俺は、俺は…絶対にハンターになったるんじゃぁぁぁっ!!」
　しかしそれを根性という名前の金欲で振り切りレオリオは階段を上がり、登っていく。
「(千石やったらそないに根性ださんわ…例え近江連合の会長の首が目の前にあったとしてものう…大したもんや。)」
　レオリオの気迫を見た龍司は感心した。千石のように楽をして金や権力を取るのではなく、目の前に苦しさがあってもそれをやり遂げる根性があったからだ。そんな根性を出せる人間は滅多にいない。四次の組長から直参まで成り上がった黒羽組の黒澤翼などがそれに当てはまる。
「後もう少しでゴールや…頑張り…」
　自分に言い聞かせるようにレオリオを応援してゴールまで走り

きった。

第４話　二次試験開始

「そいつは偽物だ！俺が本当の試験官だ！」
　サトツがヌメーレ湿原に向かう前に説明していると突如現れた自称試験官の男が受験者を騒然させ、さらに口を開く。
「そいつは俺を不意討ちして…ぎゃあっ!?」
　試験官を名乗った男がヒソカのトランプによって殺され、一部を除き全員がヒソカを見るとヒソカは笑みを浮かべていた。
「本当に試験官ならこれくらい避けるはずだよね♠ねえ？本当の試験官さん◆」
　そして全員がサトツの方へと振り向くとサトツがトランプを指先に挟んでいる姿があった。
「受験番号４４番、いくら私が本当の試験官かどうか確かめる為とは言え今度私を含めた試験官に攻撃したら失格と見なします。」
「ふふっ…そりゃ失礼、今度から気を付けるよ♣」
「では皆さん、私に着いてきてください。」
　サトツが再び走りだし、ヌメーレ湿原でのマラソンが始まり、脱落者が再び現れ…次々と立ち去った。
　そんなことはさておき、龍司は順調に進んでいた。
「（さて…この調子やったらゴンも問題なく着いて来れるやろ。少し前に行こか。）」
　龍司はそのままサトツがいる先頭へと向かって行こうとしたが…
「ってえっ!!」
　後ろからレオリオの悲鳴が聞こえ、そちらを振り向くとレオリオがヒソカにやられていた。
「（…しゃあない。流石に人を平気で殺すような奴は放っておく訳にもいかんし、お仕置きせなあかんな。）」
　龍司は振り返り、レオリオとヒソカの元へ走って行くとレオリオの他にもクラピカ、ゴンがおり三人は怪我を負っていた。なおキルアについてだが龍司よりも先に先行しており、既にいない。
「おや？どうやらちょっとは楽しめそうな人が来たね♠」

「黙り…ワレ何しとんねん？」
　龍司は怒りに満ちていた…ヒソカは人殺しをしておいて笑っているのだ。ゾンビ事件の時の黒幕のＤＤと同じような狂気がヒソカにはあった。
「試験官ごっこ。まあ簡単に言えばふるいをかけているのさ◆」
　そしてその言葉が龍司を完全に怒らせた。
「ふるいやと…？そのせいでどんだけの人死んだと思う!?殺す必要なんぞどこにあったんや!?」
　二階堂は龍司を誘き出す為に神室町の人間を犠牲にした。ＤＤは戦場にいる人間を安楽死させてやりたい…どちらも狂気に染まっているとはいえ目的はあり、遊びで殺すことはなかった。だがこのヒソカは試験官ごっこと言う遊びで人を殺していたのだ。前者二人の時点でも怒っていたのだ。ヒソカの動機で怒らない理由はない…
「ふふ…僕の攻撃で避けられないような奴らはハンターになったらすぐに死ぬよ♥それに君も人を何人か殺しているじゃないか♣」
　ヒソカの言っていることはもっともでハンターの資格証を売るだけでも７代は遊べる金が手に入れられる為、年に５人以上が殺られているのだ。この数は一見少ないように見えるが一回のハンター試験で合格するのはだいたい３人前後で豊作でも５人で中には合格者がいないという例もあることから年々ハンターの数が減っていることがわかる。
「ワレの人殺しとワシの人殺しを一緒にすんなや。ワシはワレのように堅気の人間は殺しとらん。」
　龍司のいっていることは正しく、堅気の人間を痛め付けることはあっても殺すことはなかった。その代わり千石や高島など近江連合の幹部達を殺したが千石は桐生を誘き出す為に女や子どもに手を出し、高島は龍司の妹である狭山薫を殺そうとした。どちらも龍司の逆鱗に触れていたのだ。
「ハンターは堅気じゃないよ。ハンターのなかにはブラックリストハンターっていう犯罪者を取っ捕まえるハンターもいる。いつ殺されるかわからない職業なんだよ♠」

「未来どうなるか知らんが今は堅気や。殺す必要はない…」
「そこまで言うなら僕の相手…」
ピピピピ…
ヒソカの携帯が鳴り、手に取って話し始めた。
「(ゴン、レオリオ、クラピカ…今のうちに逃げとき…ここはワシが引き受けとくわ。)」
龍司は三人にアイコンタクトを取ると三人とも首を横に振った。
「(それは無理だ。私達が行けばリュージ…貴方は無事でいられない。)」
「(俺はリュージのオッサンのように強えって訳じゃねえが…おんぶに抱っこって訳にもいかねんだよ!!)」
「(リュージさんが残るなら俺も残る!)」
クラピカ、レオリオ、ゴンの順にアイコンタクトを返され、龍司はずいぶんと信頼されていると感じ、余計に死なす訳にはいかないと再びアイコンタクトを取ろうとするがヒソカの口が開かれてアイコンタクトを取るのを中止させられた。
「僕は用事が出来たからこれで失礼するよ♥」
それだけ告げるとヒソカはあっという間にいなくなり龍司も追いかけようとするが三人に止められた。
「お前ら邪魔すんなや!あのまま逃がしたらあいつは受験者を殺す!」
「下手に追いかけて試験を落としたらどうするつもりだ!」
「そうだよ!リュージさん!あいつと関わるより試験に合格しないとダメだ!」
「…くそが!」
龍司はヒソカを逃がしてしまったことに後悔しながらも龍司達は無事に二次試験会場へと移動した。
〜二次試験会場〜
茶番じみながらも試験官の二人、ブハラとメンチはサトツと交代して課題を出した。最初の課題はブハラが提案した豚の丸焼きだった。

この島に普通の豚はいるはずもなく、代わりにいたのはモンスターともいえる巨大な豚、グレイトスタンプだった。龍司は弱点である鼻を殴り、気絶させて丸焼きを作り提出して合格した。ゴンやレオリオ、クラピカもそれを真似て同様に合格した。

「さあて！それじゃ私の課題は寿司よ！ただし寿司は寿司でも握り寿司ね！チラシは受け付けないよ！」

次の試験官、メンチが課題を出すと受験者達は騒然とした。その理由は龍司の世界では寿司は日本料理の代表格で世界的にも有名な料理だったがこの世界では違う。日本に相当しているジャポンは鎖国しており、受験者は寿司の文化を知るよしもない。

「寿司かいな…ワシは寿司職人やないが寿司を知っとる…」

「マジかよ!?リュージのオッサン!?」

「どんなのだ!?」

「やかまし。せやな…魚が必要な料理や。それから…」

「よっしゃぁ!!川だ！」

レオリオが川に向かい、それに続いて受験者達も我も我もと川へ向かっていく。ここに残ったのは龍司ただ一人だ。

「まだ話は終わっとらん言うのにせっかちなやっちゃの…」

龍司は自前のタコを捌き始めた。そう、握り寿司は別に魚オンリーじゃなくてもいいのだ。少なくとも日本の回転寿司ではハンバーグをシャリの上に乗せたハンバーグ寿司なる物もある。その発想から龍司は船で釣ったタコを捌いて作ろうとしたのだ。

「こんなもんやろ。後は銀シャリや。」

タコを捌き終わると今度は炊きたてのご飯に酢をかけ、シャリを作り先程捌いたタコを乗せる…これで完成だ。

「試験官はん。これでどうや！」

「タコぉ？形はあっているけど何で魚じゃなくてタコなの？」

「もしかして知らへんのか？魚やのうてタコでもイカでもこんな風になっとればワシが住んでいたジャポンじゃ寿司言うんや。」

「ええ～～!?嘘でしょ!?」

「ホンマや…食わず嫌いせんではよ食ってくださいや。」

「仕方ないわね…」
　メンチはしぶしぶそれを醤油につけて食べた。
「あんた何者？タコがこんなにうまいなんて初めてよ。」
　メンチはそう言ってもう一貫口にして食した。それだけ龍司の作った寿司が旨かったのだ。
「ワシはリュージ＝ゴーダ。たこ焼屋や。タコを捌くんやったら誰にも負けへん…負けたら亡うなったおやっさんに笑われるわ！」
　それは確信だった。何しろ自分の師匠であるおやっさんは大阪人顔負けのたこ焼を作り、龍司はそれを学んだ。おやっさんは二階堂に殺されてしまったが龍司の心の中におり、龍司を支えている。タコを捌く時もたこ焼を作るときも変わらない。
「（なんて気迫なの…!?それに二人いる！）」
　そしてメンチは龍司の後ろに誰かがいたのを感じた。それは龍司の師匠のおやっさんだった。
「…本当なら落としたいところなんだけど、あんたの魂しっかり見せて貰ったから合格よ！」
「よっしゃぁっ！」
　こうして龍司は二次試験を合格した。
　その後、受験者達が魚を持ってきて龍司に寿司の作り方を尋ねるが龍司は「自分で考えろや」とだけ告げてたこ焼を作り始めた。それがヒントだと思ったゴン達は丸いおにぎりに魚を突っ込んだナニカを提出して不合格。龍司以外で唯一寿司を知っていたハンゾーも味がなっていないという理由で不合格にされて作り方をばらしてしまい、結局味で決めることになった。
　数分後
「悪り！腹一杯になっちまった！」
　当然メンチの腹が持つわけもなく、合格者は龍司のみとなってしまった。当然龍司がメンチに黄金色の寿司を渡したと思い込む受験者がおり龍司に突っかかってきた。
「てめえ！どうせイカサマしたんだろ！」
「しとらんわ。それにその証拠はどこにある？」

龍司は冷静に反論するが受験者には馬耳東風、まるで意味をなさない。
「うるせえ！俺はブラックリストハンターになるんだ！こんなふざけた試験で落ちてたまるか！」
故に受験者は殴りかかる。何で龍司が合格なのに自分は合格でないのかと言う嫉妬だ。
ドガッ!!
龍司はその受験者の腹に一発殴り、倒した。神室町や蒼天堀等ではこれらのことが日常茶飯事であり龍司はそれに慣れていた。
「やかましいわ。だいたいそれやったらワシやのうて試験官はんに聞けや。それにそないな程度でブラックリストハンターなんぞ無理や。止めとき…」
「ガッ…ゲッ…」
「まあ気持ちはわからんでもない。…試験官はん！いくらハンター試験とはいえこのままワシ一人だけ合格やったらマズイんとちゃいまっか？」
「うるさいわね。もう確定事項なのよ。それとも合格取り消されたい？」
「いや彼の言うとおりじゃぞ。メンチ君。」
メンチが龍司の言葉に反論すると上空から声が聞こえ、そちらの方に注目すると飛行船がそこにあった。
「ネ、ネテロ会長～!?」
そしてその声が現ハンター協会会長ネテロだと言うことがわかり受験者達は騒然とした。

第5話　ハンター協会会長ネテロのゲーム1

ハンター協会会長、それはハンターの中でもっとも立場の高い人物であり…その人物が龍司達ハンター試験受験者の前にいた。
「か、会長…何故ここに？」
メンチは顔を青くして会長、ネテロに尋ねた。彼女が顔を青くしているのは理由がある。ハンター試験で会長が審査するのは最終試験であり、二次試験で来るような人物ではない。来るとしたら自分がヘマやらかしてしまった時くらいだろう…二次試験でムキになり本来の目的を忘れ、龍司以外全員失格させてしまったという心当たりがあり、怒られるのは目に見えていた。
「何故もクソもそこにいるブハラ君から聞いたんじゃよ。」
その瞬間、メンチはブハラを親の仇を見るような目で睨むとブハラの背筋に吹雪のような寒気が襲った。
「メンチ君は課題の料理を味で鑑定することになったんじゃな？私が満足出来るようなものを作れと。」
「ええ。それが何か…!?」
「別に味で審査することに文句は言わんよ。たかが味、されど味…馬鹿にはできん。ただ、星付きの美食ハンターを満足させるような味が素人に出せるのかね？」
「そ、それは…」
「そこの合格者は運が良く料理が出来たから良いものの…現に他の受験者はズブの素人。美食ハンターを目指しているなら別じゃがその料理が食える程度なら問題はないじゃろ？」
「…はい。その通りです。」
「という訳で、再試験を行うぞい。気球に乗ってくれ。」
ネテロが受験者に気球に乗らせるとメンチが再試験内容を伝えた。その内容はクモワシの卵を使ったゆで卵を作りメンチに渡すというものである。材料さえあれば誰でも出来るが問題はその材料であり、それは高度数百メートルの位置にいる気球の下にある。当然パラシュートなんかはこの気球にあるはずもなくパラシュートなしで飛

び降りなければならないという事態が受験者達を震えさせた。しかしゴン達四十数名がメンチに卵料理を食べさせ合格した。
ちなみに最初のメンチの試験で合格した龍司は特例ということでこの試験を受けなくても次に進めるため呑気にステーキを食べていた。
「ふぅ～…仰山出してやったわ。」
トイレから龍司が出るとその先にはゴンとキルアが話しをしていた。
「(同世代は同世代同士か…ワシはそないな時代はなかったのう…)」
それは龍司の父親、郷田仁が原因だった。郷田仁は当時から既に5代目近江連合会長という関西のヤクザ組織のトップに立っていた。その為、龍司と同級生は当初こそ龍司を避けなかったが親に言われ、同級生達は避けるようになった。
それ以降、龍司は群れるのを嫌うようになったが同級生が高校生にカツアゲされた時も一番に怒ったのは龍司であり、仕返しとしてボンタン狩りをした。もっとも当の本人は否定してムシャクシャしたからという理由にするだろうが。
「ホッホッホッ…子供は元気でええのう。」
龍司がそれを眺めていると後ろから声が聞こえ、振り向くとネテロがいた。
「会長はん…いつの間にそこにおったんや?」
龍司はネテロに尋ねると笑ってごまかされ、顎に手を添えた。
「ところでリュージ君…だったか?あのメンチ君が君の事を褒めていたぞい。」
「当たり前や。ワシはたこ焼き屋や。タコ裁くことに関しては誰にも負けん。」
「そうか、そうか。ところでリュージ君。今暇かね?」
「…?まあ暇やな。こないなところでたこ焼きつくっても火事の元になりかねんしの。」
「それじゃちょいとこの暇な老人と付き合ってくれんか?暇で暇で死にそうじゃ。」

実際には仕事をしていないだけで本来であれば机に向かって何時間も拘束される。しかしネテロは有能すぎるあまり本気でやれば自分の楽しみという名前の副会長とのじゃれ合いが減ってしまうのでやらないのが理由だ。
「(組織のトップが暇で暇で死にそうってどないな組織やねん…)」
そんなことを知らない龍司は呆れ、脱力する。組織のトップの人間ほど忙しくなるのは父親の郷田仁を間近で見て知っている。例えば当時の近江連合の本部長が東城会の嶋野に殺されるのを黙って見ていた佐川司の始末や、その後継問題の解決などを始め様々である。だがそれでも龍司は憧れた。郷田仁という伝説級の極道を超えることを…
「まあええわ。やったろうやないか。」
龍司はそれを承諾し、不敵に笑う。龍司は実の両親こそ韓国人だがその気質は大阪人でありノリもいい。
「ふむ…ここじゃ狭いから移動するぞ。構わんね?」
「問題ない。狭くて負けた言われてもおもろないわ。ゲーム言うんは最高難易度に挑戦してなんぼのもんやしな。」
「ふむ…では移動しよう。」
そしてネテロと龍司が広場へ向かうと二つの影がその後を追っていった。
～広場～
「でどないなゲームをするんや?まさかこないな場所で機械使うたゲームなわけないやろ?」
「ホッホッホ…面白いことを言うのう。これから行うゲームはワシのボールを奪うゲームじゃよ。」
ネテロはボールを取り出し、それを龍司に見せる。
「このボールを奪えばええんやな?」
「ルールは簡単。時間制限以内にワシのボールを奪えば勝ちじゃ。何をしてもいいぞ。殴っても蹴ってもワシのボールを奪えばオーケー。ワシは手出しはせん。時間は気球が次の目的地に着くまでじゃな。」
「会長はん…そんだけ大口叩く言うことは余程自信があるっちゅうこ

とやな？」
　龍司がここまで大口叩かれたのは久しぶりのことだ。龍司のボンタン狩りの餌食となった高校生達は報復として数人がかりで大口を叩き、龍司を襲った。ここで普通の小学生（でなくとも大人でもそうだが）ならボッコボッコにやられてしまうのだがこの時から龍司は強く、逆に大口叩いた高校生達をボッコボッコにしてやった。そのエピソードが大阪中に伝わり、龍司に大口を叩くものはいなくなった。
「こう見えてもワシめちゃくちゃ強いし。万が一ワシのボールを奪うことが出来ればそれこそハンター試験を無条件で合格にしてハンターの資格をやるぞい。」
「何だよそれ！俺もやる！」
「俺も俺も！」
　ハンターの資格を取得出来ると聞いて飛びついて来たのは二つの影の正体…キルアとゴンだった。
「なんやお前ら。話聞いとったんかい。」
「面白そうだったし、リュージの実力がどんなもんか見てみたかったしさ。」
「さよか…会長はん。どうするんや？あんたがそんだけ大口叩けるんなら今更三対一になってもそないに変わるもんやないやろ？」
「もちろんいいぞ。ルールの追加をするぞ。ワシ以外誰がとってもここにいる全員合格じゃな。」
「ほう…まだ言うか。そやったら本気で行くで！」
　こうして龍司、ゴン、キルアの三名とネテロがゲームを始めた。
　～おまけ～
　その頃…クラピカとレオリオは互いに食事をしていた。彼らは真逆の性格であり喧嘩することも多いのだが…互いに認めていた。２人の関係は憎まれ口を叩き会う友人といっていいだろう。
「レオリオ。」
　食事が終わり、クラピカは紅茶を飲み、それを置くとレオリオの名前を呼んだ。
「あん？」

「リュージは一体何者なのだろうな？」
「そりゃ料理人じゃないのか？たこ焼き…だったけか？そんなものを作っているような奴だぜ？」
「二次試験の前にトンパという男に見せた殺意。あの時のリュージは堅気の人間じゃなかった。」
「というか見た目からして堅気じゃねえだろ？」
　最もである。レオリオは茶々を入れ、龍司のマフィア姿を思い浮かべると刀でバッサリと他のマフィアの静粛をする姿が思い浮かび、天職マフィアじゃないかと思えてしまった。むしろそれ以外に思いつかない。
「だがしかし…」
　その後レオリオとクラピカの会話は続いた。

第６話　ハンター協会会長ネテロのゲーム２

龍司は本能で感じていた。目の前にいる老人は強い。それは正しく、ゴンやキルアを使ってどのくらい動けるか様子見をしても全く敵わずにいた。龍司を倒せる桐生は秋山と谷村の２人程度ならばほぼ無傷で倒せてしまうがネテロはその域を超えていた。ゴンやキルアは少なくともその年の頃の龍司の動きを超えている。その力を持ってしてもネテロには敵わない。

「流石やのう…会長はん。」

だから龍司は賞賛した。龍司は禁句である関西の龍と呼んだ男に対しても実力があれば認め、酒を奢ったりと気前が良い。それはネテロに対しても例外ではない。

「褒めたところでボールは渡さんぞい。それよりもかかってこんのか？」

ネテロは首をかしげ、挑発の仕草をするが龍司は乗らなかった。

「もう少し様子見させてもらいますわ。あんたはゴンとキルアを倒したところでちっとも体力を消費せん。今手加減しとんのが何よりの証拠や…」

「えっ!?」

それを聞いたゴンがネテロを見ると「ありゃバレた？」と笑っているネテロがおり、本当に手加減していたようだ。もっともキルアは気付いており、不貞腐れていた。

「右手と左足…使っとらんのが何よりの証拠や。それ使うた時があんたが少し本気になった時や。ワシはそん時まで様子見させて貰うわ。」

「仕方ないの…じゃあワシ少し本気だしちゃお！」

ネテロはお茶目にそう言ってキルアとゴンの攻撃を右手と左足のみを使って防御し始めた。

「さっきと変わらないやないかい！」

大阪人の性質故に、思わずツッコミを出してしまう龍司だった。

「冗談、冗談。流石にこれ以上はキツイしの。両手両足で行かせても

らうぞい…」
「ウッ!?」
「ガハッ!?」
　そしてネテロは一瞬でゴンとキルアを倒してカタをつけると龍司はとんでもない化け物だと感じた。
「(こいつ、全盛期の親父…いやそれ以上や。)」
　郷田仁が五代目近江連合会長を２０数年もの間その座に就いてこれたのは運が良かっただけではない。生粋の武闘派だったからだ。晩年は年老いて車椅子を使うことになったが若い頃は、高校生数人がかりでも倒せない龍司（１２歳）を物理的に抑えたりすることも出来たりしていた。その為、自覚はないが龍司の中で仁を基準にしている部分もある。
「さて…やるかね？」
　その言葉に龍司は正気に戻り、目をネテロに向けた。
「ほな…行くで。」
　龍司の戦闘のスイッチが入り、目つきが変わった。
　そして龍司が走り出し、気合の入った拳を入れようとするもネテロに躱された。
「ぬりゃぁぁぁっ！」
　だが龍司は諦めずに今度は左の拳を使い、ネテロに当てに行く。そのスピードからは逃れることは出来ない。普通…いや龍司と同じ身体能力を持っていても防御に移るのがやっとだ。
「スピードが足りんの。」
「(ホンマに人間かいな!?まだゾンビと言われた方が納得いくわ!!)」
　だがネテロはそれを避けた。その動きの速さはゾンビ化してしまった林を思い出す。
　林弘
　元近江連合舎弟頭補佐という幹部でありながら龍司の生き様に惹かれ、龍司の組織、郷龍会に所属した。しかし龍司が去った後郷龍会を引き継いだ二階堂とは折り合いがつかずゾンビ（正確には実験体）にされ、神室町のゾンビ騒動を引き起こした。

「（動きを抑えたとしてもあのスピードや…まともにやり合うたら勝ち目はない。なら…!!）」
　龍司はとある装備品を外した。すると龍司の身体から青いオーラのようなものが見えた。そのオーラはヒートと呼ばれるもので興奮すると一部の人間（冴島なども含む）が扱えるものだ。使用用途は様々でヒート状態になると通常よりも強力な攻撃を繰り出すヒートアクションや銃とヒートを組み合わせた攻撃、ヒートスナイプが出来るようになる。またヒート状態であれば体力を回復したり、刃物での攻撃をガードしたりすることも出来る。
　これまで龍司がヒート状態にならなかったのは龍司が外した装備品にある。それは平常心の手ぬぐいと呼ばれる装備品でそれを装備品していれば戦闘において常に平常心を保つことが出来る…らしいが日常では何の役にも立たない。ハンター試験会場に向かう途中、それを装備していた龍司がキレたのが何よりの証拠だ。
「ほう…」
　ネテロはそのオーラを見て感心していた。ネテロはそのオーラを使えるとは思いもしなかったのだ。
「らぁっ!!」
　そして龍司が攻撃すると龍司に違和感を感じた。身体は軽く、スピードも増しパワーも増した。つまり身体能力そのものが上がっていたのだ。ヒート状態になっても身体能力を上がることはなかった。しかし今は違う。別の力が漲ってきている。
「甘い甘い！」
　しかしネテロはさらにスピードを上げ、それを躱す。
「どりゃぁぁぁぁっ!!」
　そしてボールが擦り、ネテロの手の元を離れ龍司はそれを掴みに行った。
「ぬうっ!!」
　龍司がフラグを立てる間もなく、ネテロは素の力では間に合わず、念の力を使い自分の手元から離れたボールをキャッチした。
「惜しかったの。努力賞じゃ。」

「なんちゅー爺さんや…」
龍司は完全に脱力し、その場に座った。ガチ勝負ならば龍司は何度も立ち上がるだろうが今回は遊びだ。故に諦めた。
「ほっほっほっ…ところでこれが何だかわかるかな？」
ネテロはそう言って人差し指を立てた。
「…人差し指がどないした？」
だが龍司は脱力しているせいかその行動を理解していなかった。
「違う違う。目を凝らして見たらわかる。」
龍司はヒート状態のまま目を凝らしてそれを見た。するとネテロのヒートが人差し指から数字を作り出していた。
「なっ…会長はん、どないなっとんねん!?」
龍司はそれに動じずにはいられなかった。ヒートは通常、垂れ流れているようなものだ。故に何もせずに時間が経つとヒートが減り平常心に戻る。
それはともかく垂れ流れている為、ヒートで形を変えることは無理なのだ。だが目の前にいるネテロはそれをやってのけている。
「それで何が見えた？」
「数字の6や…せやけどあんた何者や？」
ネテロの質問に答え、龍司は頭の中の疑問を無くすためにネテロに問う。
「ハンター協会会長、アイザック＝ネテロ。」
「そないなことはわかっとんねん。何でヒートを操れるんや？」
「ヒート？もしかしてこれのことかの？」
ネテロはウネウネとオーラを操り、龍司を驚かせる。その様子は第三者から見ればかなりシュールだった。
「それや。ワシは今まで極道の世界で生きてきてヒートを扱える人間は何度も見てきた。せやけどあんたはその比やない。正真正銘、文字通りそれを操っとる…何者や？」
「ふむ…その前に一つ言わせて貰おう。お主の言っているヒートはワシらプロハンターは念と呼ぶ。この事は世間には知られてはおらぬ…何故だかわかるか？」

「危険過ぎる…ちゅうことや。ワシの故郷でもヒートが使えるんは極少数やがその強さはヒートが使えない人間の比やない…その力を間違うたらエライことになる。会長はんのいう念の力もそうやろ？」
「だいたいそんなものかの。ワシがその事を教えた理由は単純…お主はこの先、この子達と共に行動することになるだろう。その時に念の力について聞かれたらお主が教えるのではなく自らの力で生み出させた方がいい。無闇矢鱈に教えても困るからの。」
「それが理由かいな。まあ言うつもりもあらへんし、ワシはヒート…いや念について聞かれても何も言わへんわ。こいつらの成長はあくまでこいつらのもんやしな。」
「助かるわい…ところでリュージ君、いつ頃使えるようになったのか教えてくれんか？」
「そやな…こいつらと同じ頃にはもう使えるようになったわ。」
　龍司の言っていることは事実だ。その時からすでにヒートを扱えるようになっていた。ただ龍司は力任せにやっていた部分もあり、ヒートを扱える技術はまだまだのものだった。
「ふーむ…もったいないのう。それだけのオーラを効率よく使えばもっと強くなれるかもしれん。」
「なら期待に応えなあかんな。試験が終わるまでそのオーラを自在に操れるようになっとくわ。」
「それは楽しみじゃわい。」
　ネテロが子供のような笑みを浮かべると龍司はゴンとキルアを担いだ。
「…ほな、ワシはこいつらを部屋に寝かしとくわ。お休み、会長はん。」
「それではの…」
　龍司が出て行き、ネテロはその部屋にあった電話機を取った。
「もしもし、機長か？順調？うん…すまないが少し遠回りして貰えない？ありがとう。じゃあよろしく頼むよ。」
　次の試験会場に着くまで少し時間がかかったが受験者達から不満の声はなかった。

～おまけ～

かつて若き頃の龍司をボコボコにした真島吾朗はとある悩みを持っていた。

「(兄弟…はよ帰って来んかい…)」

真島と同じ東城会若頭補佐である冴島大河のことである。彼は中国に出張しており、取引先で殺されないか…などという心配はしていない。むしろ逆にマフィア達が殺されないかなどという心配だ。

冴島自身の性格からしてそれはありえないが冴島のパワーは異常だ。人間を卒業して人外の就職活動をするくらいにあった。そんな彼が手加減失敗してしまったらもちろん（向こうが）死ぬだろう。

「(でもそれはそれで楽しみや…何せ兄弟と戦う口実が出来るしの…!)」

だがそれ以上に真島は楽しみだった。冴島が向こうのマフィアを殺せば東城会に追われ、真島はその刺客として戦うことになるだろう。そんな展開を想像して真島は口元の笑みを浮かべていた。

「あん時の借り返したるわ…兄弟!」

真島は冴島に敗北しており、その悔しさから腕を磨いていた。具体的には地下闘技場で高速のあまり、分身することに成功して過激な観客が対戦相手に同情するくらいボコボコにしたり、カツアゲ君から１０億円くらいカツアゲしたり、旧堂島組や旧風間組、旧錦山組の面倒を見たりと様々なことをやった。

「ヒーッヒヒヒヒ!!」

真島の笑い声が事務所から漏れ出し、近所迷惑になったのは余談である。ちなみに真島は分身したり、カツアゲ君が１０億円持っていたのが念能力によるものだとまだ気づいていなかった。

第7話　トリックタワー攻略1

龍司達受験者はトリックタワーと呼ばれるところの屋上にいた。第三次試験は至って単純だ。現在いる屋上から下まで降りてこいというものだ。ただしトリックタワーは高さ数キロにも及び、まともに外から降りようものなら周りにいる巨大な鳥が襲いかかってくる。それで犠牲になった者もおりガトリングガンがあればせめて助けてやったかもしれないがないものは仕方ない。龍司は見捨てて内部に入る為コツコツと歩いて調べた。

「うおっ!?」

すると龍司の床が抜け、トリックタワーの内部に入ることに成功した。それを見た受験者達は我も我もと床を調べ龍司と同じようにトリックタワーの内部へと入っていった。

「…ここは?」

そんな中、龍司は尻餅をついた状態で立ち上がると、龍司よりも綺麗な金髪が見えた。

「どうやら成功したようだな…」

そう言って立ち上がる声は龍司が聞いたことのある声だった。

「クラピカ…!」

クラピカだ。彼は消えた龍司と数人落ちた受験者を見て規則性を見出し穴を見つけることが出来た。

「その声、リュージか?」

そして幼い声が聞こえそちらを見ると光り輝く銀髪が龍司の視界に映った。

「せや…キルアもここにおったんかい。」

「つだーっ!!痛でーっ!!」

そしてまた聞いたことのある声が聞こえた。しかしあたりは暗く周りがよく見えない…そう思った時、いきなり視界が明るくなった。そして声が聞こえた方に向くとそこには尻をさすりながら痛みを我慢しているレオリオが見えた。

「レオリオ…我慢しろや。」

龍司が呆れ、そう声を出す。
「あ、皆ここにいたんだ！」
そして見当違いなところから声をかけてきたのはゴンだった。そしてゴンの手元にはスイッチがあり、現在その場所に手を置いていることからゴンがそのスイッチを押したと考えられる。
『5人揃ったようだな。』
スピーカーの音とともに男の声が聞こえ、龍司達はそれを聞く。その男の声はトリックタワーの責任者、リッポーという男だ。龍司達がトリックタワーの屋上にいた時も説明し、内部に入る様子を実践したのも彼だ。
『ではこれからは我々のルールに従って貰う。5人1組で君たちは道に沿って移動して貰おう。ただしこの先には別れ道がある。その道に遭遇した時は腕時計を渡すから○か×か多数決で決めて進みたまえ…またある特定の場所に着いたらその都度説明する。では諸君グッドラック。』
ブチッ！
そんな音を聞いて龍司達は移動することにした。
左右どちらかを選択する時は龍司は右に押し、それに同意したのはキルアとクラピカ。そして残り二人が左を選択し、多数決で右に行くことになった。
次に階段を降りるか上るかを尋ねられた時は龍司とレオリオが降りる方を選び、他の三人は上るを選び階段を上る。
更に冷麺か冷やし中華のどちらかを食べなければいけないかを尋ねられた時はレオリオとキルアが冷麺、その他3名が冷やし中華を選び全員が冷やし中華を食べることになった。某冷麺好きの東城会若頭が龍司の代わりにそこにいたら冷麺を即選んでいただろうが現実はそんなものである。
何度もそんな選択肢を選び…5人は広場についた。
「今度はどんな多数決なんだ？」
レオリオは不機嫌そうに呟く。これまでレオリオは何の因果か満場一致以外は少数派の意見に回ることが多く、不満が溜まっていた。

「そうでもなさそうやな。」
　龍司は向こうから人影が見え、それを遠目で確認した。
『諸君、ボーナスチャンスだ。』
　そして龍司達と同じ人数…フードを被って来た五人が向こうの穴の前に止まるとリッポーが説明し始めた。
「ボーナスチャンス…？」
『そうだ。諸君には残り時間をかけてこのトリックタワーの住民と勝負してもらう。テーマは囚人が決める…ベッドは最小1時間。賭ける人はこれから勝負する人。もちろん何も賭けず降参するもよし…だがこの勝負している時間も残り時間を消費することになるだけでなく、3勝しなければペナルティがあるから気をつけろ。それじゃ。』
　リッポーは説明し終えると放送を切った。
「ほならワシが最初にいこか。」
　龍司が拳の骨を鳴らし、前へと出る。最初に勝ち星を挙げればそれだけ心理的に有利になる…当然誰も反対しなかった。
「ほう…それじゃあこっちは俺が相手だ。」
　囚人のチームの一人がそう言ってフードを外す。するとそこには剛力とも言える肉体があった。
「あれは…強盗殺人で逮捕されたベンドットだな。」
　レオリオはその顔を見たことがあったのか解説し始めた。
「レオリオ、知っているの？」
　レオリオが解説するとゴンが反応し、質問する。
「ああ、勉強の息抜きに偶々ベンドットのことがバラエティ特集でやっていたんだ。確か懲役１９９年だったけか？まさかここにいるとは思わなかったぜ…」
「レオリオらしいと言えばレオリオらしいな…何はともあれ、あの男油断出来ないな。そうだろう？」
　クラピカはレオリオがどうでも良さそうなところから情報を入手したことに呆れるが、龍司の対戦相手であるベンドットに注視する。
「まあ確かに動きからして元軍人…あるいは傭兵だと思うけどリュージと比べたら大したことないぜ。」

「…そこまでリュージは強いのか？」
「あのおっさんはアマチュアだけどリュージは何て言や良いのかわかんねえけど…とにかくやばい。俺からしても相当な修羅場を乗り越えてきたって感じだ。」
キルアの言うことは間違いではない。右腕を失ったとはいえ近江連合の追っ手を振り切ったのだ。真島にして執着心の塊と言われた佐川司ですらも追っ手から逃れることは出来なかった。もちろん龍司を崇拝している二階堂の工作もあっただろうがいくら巨大な組とは言え所詮一つの組がやれることはたかが知れている。相手は構成員2万を超える近江連合組織全体なのだ。
組織全体を相手にして勝てる組と言えば東城会でいうと全盛期堂島組、あるいは二代目錦山組くらいのものでこの二つの組は例外中の例外だ。何しろ二つとも組織内で一強状態であり、二代目錦山組に至っては堂島組、嶋野組、真島組と次々と組を吸収していったおかげで約半数の東城会の構成員がその組員という有様だった。
その話はともかく、組織からの追っ手から狙われるという修羅場を毎日のように過ごした龍司にさらなる修羅場が襲いかかる。…ゾンビ事件だ。
龍司は追っ手から逃れ、平和にたこ焼き屋としておやっさんの元で修行していたが、ゾンビが現れおやっさんもゾンビにされた。それだけでなくかつての部下である林や二階堂もゾンビとなり龍司の中ではかなりの修羅場だった。普通なら発狂してもおかしくないほどの壮絶な人生を過ごしてきた。それでも尚龍司は立ち直ってたこ焼き屋として過ごして来た。
しかし追い打ちをかけるかの如く、今度はどこかもわからないような場所に流されるという修羅場を迎えた。ここまでくれば、もはや龍司の人生は呪われていると言っても過言ではない。
そんな修羅場を乗り越え、龍司は強くなったのだ。
「ルールはデスマッチ…生きるか死ぬか…どちらかが決着つくまで殺り合う。いいな。それでいくら賭けるんだ？」
ベンドットがそういって一応確認する。

「賭ける時間は全額や。それで文句あらへんな？」
「…俺を舐めたこと後悔するなよ！」
そしてベンドットが憤怒し、龍司に襲いかかる。
ｖｓ囚人ベンドット
龍司はベンドットの攻撃を腕で防御し、すぐさま反撃へと繋げる。
「らあっ！」
龍司の右拳がベンドットの顔を捉え、ベンドットは顔を退け、ダメージを減らす。
「甘いわ！」
すると龍司はベンドットを掴んで舞台の向こう…つまり、崖へと落とした。それは崖落としの極みと呼ばれるヒートアクションでどんな敵もそれを受けたら即死するという極悪極まりないヒートアクションだ。龍司は以前、大阪で桐生と飲む前にその技を見ていた。龍司とは違い二階から投げて落とすというものだったがそれでも部下達を戦闘不能にしたのは違いない。他にも峰打ちならぬ峰刺し等ということもやっているのだ。
「まあ、こんなもんやな。」
「容赦ないな…リュージ。」
龍司が真顔でベンドットを落としたことにレオリオは戦慄する。普通なら誰でもそう思うだろう。だが神室町や蒼天堀はそのくらいのことをやらなければ逆にやられてしまう程治安が悪い。この世界でもそのくらい治安が悪いところといえば流星街くらいのものだ。
「レオリオ、初めてお前と意見があったよ。」
クラピカだけでなくゴンもそう思った。意外に龍司は過激なのだと。
「（なるほど…ああやって物理的に無力化するのもありか。）」
その一方キルアは龍司の攻撃方法から何かヒントを得ていた。
「ほな、次誰が行くんや？」
そうこうしているうちに龍司が戻り、帰ってきた。すると次はゴンが前に出て、試合をする。その内容はどちらのロウソクが長い時間まで持つかというものだったが対戦相手のイカサマを見破られ、ゴンも

見事に勝利した。
〜没案〜
「まさかここで貴方に会えるなんて思いもしませんでしたよ。」
その男はフードを外し、その姿を見せると日本人の顔立ちが龍司の目を光らせる。
「…あ？誰や？」
「元東城会直系白峯会会長、峯義孝と申します。貴方の噂はかねがね…聞いています。」
その男、峯は龍司のことを知っていた。それもそのはず、極道に生きるものならば桐生一馬と郷田龍司、そして冴島大河の三人の名前はいやというほど聞くことになる。峯も例外ではない。
「白峯会…聞いたことあらへんな。」
「私が6代目と盃を交わしたのは貴方が桐生さんと戦ってから数年も後のことです。渡世から足を洗った貴方が知らないのは当たり前のことです。」
もっとも峯はその後、桐生と戦い、敗北しリチャードソンと運命を共にした。そのはずだった。しかしどういうことか何故かここにいたのだ。
「まあええ…ワシはワレがどないな経歴持っとんのかは知ったこっちゃない。せやけど真剣でいくで…！」
そして龍司は上着を脱ぎ、上半身半裸という状態になる。するとゴン達は龍司の背中の黄龍を見てしまった。
「なっ…!?」
その黄龍はまるで生きているかのような刺青だった。その刺青が龍司に力を貸し、峯を凌駕する。
「ぬぅっ！」
だが峯とて黙っていられるほど弱くない。峯は龍司の力を技で封じ、対抗する。峯の背中には麒麟がおり、その力を引き出していた。力の龍司と技の峯。どちらも一歩も引かない戦いだった。

第８話　トリックタワー攻略２

ゴンの勝利後、次はクラピカが前に出る。
「げへへ……次は俺の番だな」
囚人の方からそう声が聞こえ、正体が見えてきた。龍司を彷彿させるような筋骨隆々の大男。顔は生々しい傷跡がいくつもあり１００人中９９人の人間がそれを見た場合、第一印象は「余程ヤバイことをやらかした危険人物」と評価すると思われる男。それがクラピカの相手だ。
「貴様が私の相手か」
だがそれに動じるほどクラピカは凡人ではない。クラピカは１００人中９９人の人間ではない。むしろ一人の側に所属する。何一つとして問題はなかった。
「勝負あったの。ワシは寝る」
龍司はもはや見るまでもない。と言わんばかりに眠りについた。その理由はクラピカとあの男の実力を見切っていた。あの男ではクラピカには勝てない。それどころか一般人にも負けるだろう。つまり見かけだけのハッタリ男ということだ。龍司は神室町や蒼天堀で鍛えた相馬眼ならぬ相人眼を持っており、林等の人物を郷龍会に引き込んでいる。もっとも龍司の最大の宿敵は人を見る目がないのはご愛嬌というやつである。
「……ジ……！　リュージ！」
それからしばらく時間が経ち、龍司が起きるとゴンが目の前に映った。
「ゴン、なんやねん？　もう終わったんかいな？」
「いいや。まだ試合があるよ」
「クラピカは負けたんか？」
「勝ったよ。ついでにレオリオも頭脳戦で勝って今のところ全勝だよ。でも向こうが『次の試合、デスマッチでこっちが負けたら賭けられる時間全てをあげる。ただし勝ったら時間制限の半分貰う』って条件を出してきたから続けることにしたんだ」

「ほなら次はあの坊主か。それなら心配あらへんな」
龍司がキルアの方へ向くとキルアが気づき、互いに笑った。
「リュージ、キルアのこと信頼しているんだね」
「当たり前や。ボール取りゲームの時であの坊主は会長はんが手抜いとったのを分かっとった。あれは中々出来る芸当やない。あの年でなくともそれが出来る言うんは相当な実力が必要や。余程の相手でもない限りキルアが負けることはあらへん」
そして向こうの相手がフードを外し、前に出てくる。その相手はクラピカと戦った男にも勝るとも劣らない大男だが何よりも違うのはドス黒い雰囲気を醸し出していた。
「!!」
レオリオだけでなくクラピカがその顔を見て驚愕していた。
「あいつは解体屋（バラシヤ）ジョネス……!?」
「あ？　解体屋？」
「１４６人の犠牲者を出したザバン市史上最悪の大量殺人犯だ。奴が解体屋と呼ばれる訳は奴の殺し方にある。奴の殺し方は自らの持つ驚異的な握力で人を５０以上のパーツに解体して殺したことから由来されている」
レオリオとクラピカが解説すると龍司が頷き、感心していた。
「ほう、中々こっちの奴らもやるやないか」
龍司の台詞の根拠はかつて蒼天堀で行われていた闘技場、三途の川底にある。
三途の川底は様々な犯罪者がシャバに出られることを願って戦わせるようにした場所だ。当然ジョネスのような輩も大勢いる。
龍司も一度だけ出場してみたが偶々龍司と闘ったのがあまりにも低レベルすぎて飽きてしまい、その後三途の川底へ通うことはなかった。
「まさかこんなところにいるとは……キルア、棄権しても文句は言わねえ。棄権しろ」
「私も今回ばかりはレオリオに賛成だ。命あってのハンター試験だ」
そんな二人の肩を叩いて、龍司は鼻で笑った。

「問題あらへん。少なくともあの程度で殺られる程あの坊主は弱くない」
「はぁ!?　何を言っているんだ!?」
「言葉通りや。キルアはあいつよりも強い。だから勝つ……それだけや」
「リュージ、私達の話を聞いていたのか!?　相手は解体屋ジョネスだぞ!?」
「クラピカ、強さに経歴は関係ない。ただ強いか弱いかそれだけや。相手がどないにバケモンだとしてもワレ自身がそれを上回っていたら勝つ。それだけや」
「じゃあリュージはジョネスよりもキルアが強いって言うのかよ!?」
「その通りや。他に理由はない」
「……ったく！　もう知るか！　クラピカ、ゴン、キルアが死にそうになったら俺達でジョネスを止めるぞ」
「そうだな。ここでキルアが死んだら先に進めなくなる可能性があるだけでなく胸糞悪い」
　二人はいつでも前の舞台へと駆けつけるように構えた。しかし次のゴンの言葉によってそれは解かれた。
「その心配はなさそうだよ?」
「ゴン、お前もか！」
「ジョネスを過小評価しすぎだ！　相手は解体屋ジョネス……我々とはレベルが違うんだ！」
　レオリオとクラピカがゴンに詰め寄り、捲したてる。それは当たり前だった。あのジョネスという男はそれほどまでに危険だと頭の中で理解していたからだ。
「リュージも言ってたじゃん。相手がどんな化け物でもそれ以上に強ければ勝てるって。ほら、もう決着がついたみたいだよ」
　ゴンがそういうとレオリオとクラピカは舞台の方へと振り向く。
「か、返せ……俺の心臓……」
　そこには虫の息の状態のジョネスがいた。そう、ジョネスはキルアに心臓を心臓を盗まれ、つまり綺麗に心臓だけを取り出されてしまっ

た。あまりにも綺麗な切り口だったおかげでジョネスはわずかながらにもこうしてキルアに詰め寄ることができた。
しかし流石に心臓がなくなったことによって力尽き、その場に倒れる。
「ほら返すよ。掌にだけどね」
キルアは力尽きたジョネスの掌に心臓をおいて元の場所へと戻った。
「信じられん……あのジョネスを殺すとは。敵になったらと思うと恐ろしいものだ」
クラピカはそう呟いた。
「ほならきっちり清算してもらおか」
「はい……」
制限時間が増えた龍司達はホクホク顔になり、下へと進む。
そして最下層の直前、龍司達は二つの道を選ぶことになった。
一つ目は一人しか行けないが罠も何もないシンプルな道。もう一つは五人全員行けるが毒ガスが充満しており非常に危険な道。このどちらかを選ぶことになった。
「ふざけやがって……あの試験官頭沸いているんじゃねえのか!?」
レオリオは八つ当たり気味に近くの壁を蹴る。危険な方の道の毒ガスの成分は身体に蓄積されれば二度と排出することはない成分だったからだ。つまり永遠に身体が動かなくなる可能性もあるということだ。一人が生き延びるかあるいは全滅するかのどちらかを選択しろといっているようなものだ。クラピカも同じような感情だった。実際この二人は相性がいいのかもしれない。
「(ま、俺はどっちでもいいんだけどさ。出来れば楽な方を選びたいよな)」
その中で唯一キルアはのんびりとしていた。というのも彼はとある事情で毒が効かない体質なのだ。そのためどちらに行っても害はないも同然なのだ。
「……それだよ!!　レオリオ!」
しかしゴンはレオリオが壁を蹴飛ばしたことによって、攻略する方

法を思いついたのだ。
「な、なんだゴン？　俺がどうしたってんだ？」
「レオリオ。今のもう一度やってみて」
「（……そういうことかいな。ひと昔のワシやったらとっくに思いついとったかもしれんが、老いたのぅ）」
ゴンが思いついたことに龍司は理解した。ゴンが思いついた攻略法。
それはここの壁を破壊して毒のない方の道と繋ぐという強引な方法だ。かつて龍司は東城会と近江連合の五分の盃を止める為にちまちま妨害工作を行うのでなく直接近江連合に乗り込んでクーデターを起こしたのだ。その上龍司の育ての親の郷田仁を誘拐したりと手段を選ばなかった。
しかしその強引さは年を重ねる毎に連れてなくなり、過激な龍司を心酔していた二階堂に龍の抜け殻と言われ少しずつ龍司も老いてきたと感じるのも無理はなかった。
そしてゴンがその攻略法を思いついたことで龍司が老いたと思えるようになったのだ。
「で、これがどうしたんだ？」
レオリオが壁を蹴ると多少ではあるものの壁の破片が散らばった。
「レオリオ分からない？　その壁は普通の壁と一緒なんだよ。でなきゃレオリオのキックで壁が崩れるわけないでしょ」
「……本当だ」
「幸いにもここには道具があるし、出来るんじゃ無いかな？」
「よし！　やろう！」
クラピカがそう言い、レオリオ、キルアもそれに頷いた。龍司はすでにツルハシを持っており壁を壊していた。
壁を壊せ！
「らぁっ！」
龍司がツルハシを振るい、壁にヒビを作る。
「そこだ！」
クラピカがそれに続き、スコップ（地方によってはシャベル）で壁

に傷を付ける。
「うらぁっ！」
今度は先ほどヒビを入れたところの周りにツルハシを振るい、そこにヒビを入れるとレオリオ、キルア、ゴンがその周りに衝撃を与える。
そんな調子で何度も龍司は壁にヒビを入れ、他の全員がそのヒビから穴を掘る。その作業が繰り返し続き遂に終わりが見えた。
「これで……最後や！」
龍司は渾身の力を込めツルハシを振るうとこれまでの手応えとは違い、壁に穴が開く感覚があった。否、実際に壁に穴が開いた。つまり一人でしか通れない道に開通したのだ。
「……やったぁっ！」
ゴンはそれに喜び、壁の穴を広げて道を進む。
「よし、行こうぜ！」
「何でお前が仕切っている！」
レオリオが仕切るとクラピカが怒る。しかしその顔は笑っていた。
「リュージのおっさんも行こうぜ」
「そやな……行こか」
キルアにそう言われ、龍司もその後に続いた。
龍司達第三次試験合格。

第9話　四次試験の概要

龍司達がトリックタワーを出るとそこは草原だった。
「ようやく外の空気が吸えるぜ」
レオリオが身体を伸ばし息を吸うがそこには殺伐とした空気が漂っていた。
「レオリオ、空気を読め」
「あんな窮屈なところから出られたんだ。別に良いだろうが」
そんな二人の会話を聞いていると、リッポーが次の試験について説明し始めた。
「三次試験合格おめでとう諸君。残る試験は四次試験と最終試験の2つ。今回の四次試験はゼビル島でのサバイバルだ」
「サバイバル？」
「そう、この試験では期限内にナンバープレートを集めるという実にシンプルな試験。先程出る際に引いてもらったカードに書かれていた番号のナンバープレートや自分のナンバープレートは各三点。その他のプレートは一点。それらを6点分集め、集合場所の試験官に見せることがこの試験の合格条件」
「集合場所？　一体どこなんだ？」
「それは四次試験内に教えることになっている。それともう一つ。ゼビル島に下船したものから順にスタートすることになっているが、ゼビル島に下船する順番は三次試験を合格した順になる。その二分後に一人ずつゼビル島に下船してもらう。以上。質問はあるか？」
「あらへん」
「それじゃ、ゼビル島に行きの船に乗って、順にスタートするように」
龍司達がゼビル島行きの船に乗ると、彼らのナンバープレートは既に隠されていた。
「(なるほど、考えることはどこにおっても変わらへんか)」
しかし龍司が堂々とナンバープレートをつけて乗船したことによってその船に乗船した受験者のほとんどが困惑していた。
「あいつ、馬鹿なのか？」

「いや、余程自信がある証拠だろう」
そう、ここにいる受験者達の大半はこの試験を合格するにはターゲットから狙われない為に自分のナンバープレートを隠し、その隙を見計らって自分のターゲットになっている受験者を狩ることこそが最良の判断であると確信している。しかし龍司はそれを破った。それを破る受験者は自分に余程の自信があるか、なにも考えていない大馬鹿そのものだ。
「(高島のように計算高い男、軽く裏を掛かれただけでも脆くなる。裏を掛かれたワレ等の反応だけで十分や)」
高島、その名前はかつて龍司と同じく近江四天王と呼ばれた男だ。高島は腕っぷしよりも頭の回転が良さで郷田仁に認められ、近江連合の本部長を務めるまでに成り上がった。そんな高島が弱点とするのは本人そのものの個人の強さではない。むしろヤクザ狩りの女と恐れられる狭山が襲いかかろうが逆に人質にしてしまうだけの腕前がある。高島の弱点は計算高い故に予想外のことに弱く、パニックになりやすい。その隙を見計らって高島を殺した位である。ここにいる受験者は高島程ではないにしても予想外のことが起こり動揺し、龍司はその反応を見て誰が自分を狙っているのかを確認していた。
「(候補はあいつらやな)」
龍司をターゲットにしていたハンターが龍司と目を合わせてしまい、動揺する。その反応を見逃さず、目を光らせる龍司の様子はまるで獲物を見つけた肉食動物のようだった。
「(ワシを狙う刺客もわかったことやし、今度はターゲットやけど、１９９番は誰や？　少なくともゴンやキルア達やないのう。あのピエロや針男でもあらへん)」
龍司が顎に手を添えながら座ると目の前に銀髪が現れたことに気付き、頭を上げるとそこには予想通りキルアがいた。
「リュージ、ターゲットは誰だった？」
「キルア、ワレはどないやねん？　少なくともワシのターゲットはワレやない。ところでキルア。ワシのターゲットに心当たりあるんやったら教えてくれや」

龍司がキルアにカードを渡すと笑みを浮かべた。
「へえ、俺のターゲットと一番違いだ」
「ほんまかいな？」
「あ、疑っている？　証拠を見せてやるよ」
キルアがカードを渡すと、そこには１９８番の文字が書かれていた。
「ついでに教えてやるよ。リュージと俺のターゲットは三人兄弟でハンター試験に挑みに来た奴らだ。だから奴らは一緒に行動してくる。そこで協力しないか？」
「その三兄弟を倒すためにワシと協力せえ言うことかいな」
「倒すこと自体は簡単だけどあのヒソカが面倒だ。ヒソカがあの三兄弟をターゲットにしていた場合俺達も巻き込まれる」
「確かにのう」
「ヒソカが来た時の対処はリュージが囮になっている間、俺がヒソカを殺る。それでどうだ？」
「話にならん」
「はあ？」
「いくらワシが囮になってもワレがあのピエロを殺れるだけの実力を持っとらん以上、作戦として成立せえへんのや」
龍司のその判断は念、龍司の世界でヒートと呼ばれるものにあった。キルアや龍司が不安定なオーラの出し方をしているのに対してヒソカはネテロ同様に安定している。このオーラが安定しているほど力を無駄に使うことはない。故に防御面でもキルアの攻撃を防いでしまうだろうと判断していた。
「そんなんやってみねーとわかんねえじゃん」
「キルア、確かにやってみないとわからへん。せやけどワシの推測じゃ通じるのは２００回に一回くらいや。そんなに体力を使うんやったら関わらずに逃げた方がええ」
「ちっ、わかったよ。俺一人でやるから」
キルアがその場を立ち去り、龍司の目の前から消える。
「（……若いのう、キルア）」

龍司はその姿を見てかつての自分を思い出していた。
「こればかりは運としか良いようがあらへんな」
龍司をターゲットにしていた人物、それは三兄弟のうちの次男だった。つまりキルアのターゲットは龍司を狙う受験者であった。故に龍司がキルアが試験中会うことになるのは目に見えていた。
「ほな、行こか」
ゼビル島に着くやいなやそう告げ、龍司は足を進める。そして四次試験が始まった。